

平成19年10月15日

柏崎市長 会田洋様

柏崎トルコ友好協会
会長 渡辺恒弘

厳重な抗議と早急な善処についての要望書

柏崎トルコ友好協会は、トルコ共和国から友好親善の証として贈られた「アタチュルク像」の置かれている現状を憂慮し、早急な善処を要望するものである。10月1日付産経新聞にも掲載された通り国際問題に発展する事態に至っている。

当友好協会は、前述した状況と理由から売却時の約定の確実な履行を柏崎市及びウエステックエナジー株式会社双方に強く要望する。

1、「アタチュルク像」の問題現状について

- ① 像が無造作に横倒しに放置され、ブルーシートに覆われて一部露出の状態にあることは見過ごすことは出来ない。
- ④ 親日的なトルコ政府及びトルコ国民にとっては屈辱的な事態である。
- ⑤ 約定に反して、この様な状態が続けば腐食損傷の危機に晒される。

2、柏崎トルコ友好協会の基本的な態度

- ① 約定に従って「アタチュルク像」の尊厳を保持出来る条件の箇所に速やかに建て置くこと。
- ④ 柏崎市及びウエステックエナジー株式会社双方は、共に責任転嫁を回避し、真摯な協議により善処を諮ること。
- ⑤ 両者は善処後の結果を在日トルコ大使館並びに当友好協会に文書をもって報告すること。

3、問題を放置した場合に起こり得る問題について

- ① トルコと日本の長い歴史的な友好関係が崩壊する。

トルコと日本の友好関係は、1890年、和歌山県串本町沖で座礁沈没したエルトゥルル号の遭難救助を機に政治、経済、文化、芸術、人的交流が一気に高まった。又山田寅次郎を始めとする民間使節がトルコの産業、経済の発展に寄与したことも親日を深める契機となった。

日露戦争における日本海会戦の日本の勝因の一つに、アタチュルクがロシアの黒海艦隊をバルチック艦隊と合流させないようにポスボラス

海峡を封鎖し通過を許さなかったことも数えられる。時代は下るが、第2次世界大戦後、国連に加盟出来たのもトルコの後押しがあったことを忘れてはならない。

又1989年のイラン、イラク戦争の際、テヘランの在留邦人救出にトルコ政府の指令でトルコ航空特別機のオズデミル機長等が決死の救出フライトを敢行したことは、日本トルコの絆の深さを如実に示したものであるとしてマスコミに報道されたことは、まだ記憶に新しい。

この様に、日本とトルコは、世界で類を見ない117年の長きにわたる親密な信頼友好関係を築き上げ保持して来たのである

- ③ この様な状態を放置することは、日本人としての国家の品格を損ねることになる。

日本国として、国際信義を失う結果となり、日本トルコ両国国民がお互いに誤った国際理解に陥る危険性がある。

4、トルコ国民にとって「アタチュルク元大統領」とは何か

「アタチュルク」は軍人であったが、オスマン帝国を倒し、近代トルコ共和国を築いた「建国の父」として絶大な尊崇の対象となっている。トルコの主要都市には必ずこの像があり、敬慕されている。アンカラの「アタチュルク廟」は高台にあり、彼を納めた棺、遺品、業績を示す数々の記録があり、祈りを捧げる人々が後を断たない。

5、柏崎市及びウエステックエナジー株式会社双方が、共にトルコ共和国に対する正しい理解が不足していることを危惧するものである。

「アタチュルク像」は単なる銅像ではなく、トルコ共和国の象徴であり、誇りなのである。両者は速やかにこの意義を理解し、一般市民への啓蒙啓発を図ると共に早急な善処を望むものである。

以上